

京都部落問題 研究資料センター通信

第65号

発行日 2021年10月25日（年4回発行）

編集・発行 京都部落問題研究資料センター

当資料センター主催「二〇二一年度差別の歴史を考える連続講座」の第二回を京都府部落解放センターで、一〇月一日に開催しました。講演要旨は次の通りです。詳しくは年度末に発行予定の講演録をご参照ください。

第2回

銭座跡村の成立

―一八世紀京都の市街地近郊にできた皮革業の村―

講師 小林ひろみさん
(奈良県立図書館公文書課会計年度任用職員)

銭座跡村は、鴨川をはさんで五条通から八条通の間に広がる大仏柳原庄の領域に享保一七（一七三二）年に開発された村である。住民の多くは皮革関連産業に従事し、人口は一八世紀末には二〇〇〇人を超える京都では六条村と並ぶ最大規模の被差別民の村となった。この村の成立には、刑警吏役を担う役人村である六条村が大仏柳原庄へ移転した際に積み残した課題が関係している。鴨川西岸の七条通より北にあった六条村は、妙法院による新地開発（収益をあげるために領地の河川敷を商業用地や宅地として開発）に伴い、被差

別民の存在が町家誘致の妨げになるとの理由で正徳三（一七一三）年に七条通より南の鴨川西岸に移転させられた。移転時の妙法院との交渉で刑警吏役を担うための条件は確保されたが、手狭であった居住区域の拡大については実現できなかつた。雪駄などの皮革関連産業を営む自営業者も多く、生産に従事する労働者を受け入れる場所の確保が急務となったのである。享保一（一七二六）年、六条村の南にあるかつて銅銭の鑄造所だった銭座跡の開発願を六条村南組の手下が奉行所に提出するが、役人村の年寄たちの反対により受け付けられなかつた。その後、享保一六（一七三一）年に六条村南組年寄と天部村年寄が開発願を提出し奉行所より認可され、翌年に銭座跡村が成立する。これらの経緯には、被差別民内の年寄と手下の階層間対立と共に年寄間の対立も反映していた。一七世紀以降の商品経済の発展に伴って、手下の中には皮革業者として富を蓄え労働者を雇うなど年寄に匹敵するような力を持つ者もでてきたのである。また年寄間にも刑警吏役を重視する北組と皮革業の経営を重視する南組の対立があつた。

また、この銭座跡村の成立には被差別民側の事情のみならず、領主の妙法院や本村の大仏柳原庄からの強力な働きかけがあつたことが、近年「妙法院関連文書」などによって明らかになった。享保年間の幕府の緊縮財政によって財政難に陥っていた妙法院が、領地の銅による土壌汚染のため農地には適さない銭座跡地から収入を確保するために本村の庄屋たちと共に被差別民に対して積極的な誘致（「計略」も含む）を行つていたのである。二度にわたる開発願に積極的に関わつていたことが明らかになつている。

銭座跡村の成立後、役人村内部の秩序から解放され商工業者として一層発展することを願う新興の皮革関連業者である家持層の手下や、より良い条件の下での皮革の仕事の獲得や狭く劣悪な環境からの脱却を願う借家層の手下たちが北組、南組を問わず数多く六条村から移住していった。

働き手の受け皿となる宅地を必要とする被差別民たちと、作物の取れない銭座跡地から地代収入を確保したい領主や本村側の利害が一致したことで銭座跡村の成立が実現したのである。（文責 編集部）

秋定嘉和先生を偲ぶ

はっかあきひと
八箇亮仁
(全国部落史研究会会員)

二〇二一年八月九日、京都部落問題研究資料センター所長の秋定嘉和先生が逝去された。八七歳であった。恒例の秋定会が昨年、今年と中止になり、元気にしておられるかと電話をしたのが六月頃であった。奥さんの話では、病院で元気にリハビリをしているということ、また電話をさせて頂きますとお伝えしたのが最後となってしまう。そこで秋定会にふれながら私が接した先生の人柄や業績をふり返ってみよう。

先生は、一九三四年三月、明石市に生まれ、兵庫県立湊川高校、立命館大学に進まれ、兵庫県立尼崎工業高等学校教諭、池坊短期大学教授を経て、短大退職後の一九九三年以降、部落解放研究所理事、大阪人権博物館館長(一九九五年)、世界人権問題研究センター第二部長(一九九六年)などを歴任され、二〇〇五年六月以降は、京都部落問題研究資料センターの所長を務められていた。先生とセンターとの関係は、一九七七年に設立された前身の京都部落史研究所の企画

委員に就任されて以降であるから四〇年以上に及ぶことになる。本当にご苦労さまであった。

この間、先生は、単著では『近代日本人権の歴史』(一九九二年)、『近代と被差別部落』(一九九三年)、『部落の歴史 近代』(二〇〇四年)、『近代日本の水平運動と融和運動』(二〇〇六年)、『人権から見た近代京都』(二〇二二年)の五冊を世に出し、史料編纂は渡部徹さんや原田伴彦さんらとの『部落問題・水平運動資料集成』全五巻(三二書房、一九七三〜一九七八年)や『近代部落史資料集成』全一〇巻(三二書房、一九八四〜一九八六年)などに『売買春問題資料集成』全一三巻(不二出版、一九九七〜一九九八年)を加えて一に及んでいる。ここには当然責任編集を務められた『京都の部落史』全一〇巻(京都部落史研究所、一九八四〜一九九五年)も含まれている。

で名づけられたものであるが、途中参加の私がここ数年間連絡係を務めさせていた。理由の一つは、あとで述べるように先生には何かにつけてお世話になつていたのである。

当初の秋定会メンバーは博物館職員であった朝治武さんや先生の著書等の編集実務に携わった宮武利正さん、金井宏司さん、松原圭さん、そして解放新聞編集長の故笠松明広さんら少数であったが、宮武さんによると、毎週木曜日の朝には飲み会予約の電話が先生からかかっていたという。私が誘いを受けた頃にはときおりの秋定会と併行して年末恒例の飲み会があったように思うが、先生の体調も考慮し、次第に年一回の飲み会に収斂していった。したがって私は当初の秋定会の雰囲気は知らないのだが、会の連絡係を担当した頃の秋定会は、先生の仕事を継承した朝治さんとの共編『近代日本と水平社』(二〇〇二年三月)や、大阪人権博物館編『近現代の部落問題と山本政夫』(二〇〇九年九月)がすでに上梓されていたこともあつてか、研究上の議論を闘わずということもなく、寺木伸明さん、加藤昌彦さんらを含む十名内外の出席者が好き勝手なことを言って盛り上がり、先生はそれらに耳を傾けながら楽しそうに酒をたしなみ、

生い立ちや部落問題研究へのいきさつ、友人や研究仲間についての不躰な質問にも応えてくれる、まさに当初の飲み会もそうであったろうという風であった。そしてこのような雰囲気はとりもなおさず、先生と私の関係をふり返る機会でもあつたように思う。

先生について思い出すのは、お会いする機会は少なかったものの、お世話になったということばかりである。四十年以上も前のことになつてしまいが、奈良の菖蒲池で開かれていた全国研究会で初めてお会いした時、先生が関わっていた京都部落史研究所を紹介して下さい、そのおかげで研究所の方々と『京都の部落史』に関する史料探訪などもさせて頂いた。また奈良市で部落史編纂作業が持ち上がった際にも誘ってくださった。先生とは一〇歳以上離れていたため、また私が教育史専門であったため、その後は話しかけることも少なかったが、研究会等で人なつこく、しかも適切な助言をしてくださる性格に惹かれていたのである。先生が世界人権問題研究センター第二部長の時代には、無理を言つて研究会の一員にも加えて頂いた。ここでも飲み会は恒例であったが、先生の読書量の多さに気づかされたのはこの頃であった。『近代と被差別部落』には小

学生時代から『講談全集』類を乱読していたと書かれていたが、この頃でもいつもポケットに文庫本が入っているような雰囲気であった。

秋定会と関連して、偶然私に与えられた最大の仕事（試練？）は、二〇一六年七月、全国部落史研究大会で先生の業績をふり返る作業を依頼されたことである。先生が「わたしの部落史研究の回顧と展望」と題する全体講演をされることになり、手島一雄さんの「秋定先生の「部落史研究」を顧みて」に加えて先生の研究業績を整理するよう要請されたのである。教育史研究も中途半端に終わった私に先生の業績を云々する資格はないのだが、箇条書きとして業績を整理するだけということ引き受けさせていただいた。これらは全国部落史研究会の『部落史研究』第二号（二〇一七年三月）に収められている。

しかし、今この作業をふり返って見ると、恥ずかしいことに先生の研究、特に民主主義や人権について理解が欠けていたことが明らかと言わざるをえない。というのは、私がこの作業で感じたことは、先生の研究が大会講演でもふれていないように、部落問題にかぎらず、転向問題や共同体論、朝鮮平衡運動、民俗学、宗教問題、女性問題、

大衆文学、活動写真等々に根を張っているということであった。それは『近代と被差別部落』に収められている柳田民俗学や喜田貞吉史学と差別、葬儀社、ハンセン病、犯罪と刑吏などを論じた「部落史周辺」、そして特に最後の著書『人権から見た近代京都』の内容、西陣の仕事と風俗、京都の映画界と人権、水上勉と京の人権文化などに見てとれる。

私はこれらの研究に感銘を受けていたが、これらの研究を先生の他の仕事と関連づけて理解することができなかつたために「幅広い関連研究」としてまとめるにとどまった。実際には、私自身が先生の研究姿勢や民主主義・人権と向き合っていなかつたということである。

先生の部落史研究が、民主主義を軸に、統計資料を駆使した資本主義と部落の産業構造分析（『日本帝国主義と部落産業』一九六七、一九九三年所収）や、解放運動を水平・融和の両運動の再検討を通して解明していこうとするところに特色があることは大方の認めるところであろう。先生の仕事において民主主義は大前提である。

たとえば資本主義と部落経済の問題は、「日本資本主義と部落問題」（一九七九、一九九三年所収）で天皇制下の部落問題として一応の

総括が示されるが、当然のように「部落解放はあくまで民主主義的要求の一つの実現であり、ここで本質というのは身分差別である」（八〇頁）と民主主義が強調されている。しかも、民主主義の問題は「身分差別」の解消であるとも、に部落経済の問題としてもとらえられることで、戦前の部落産業は「身分制的」資本―賃労働として資本主義社会の構造に組み込まれており、そのような形態のなかで国内的な差別、東アジア経済と結びついていたと整理されていた。

したがって戦後の部落経済はその再編過程ととらえられ、戦後理解においては当然のように高度経済成長期に注目が向けられることになるのである。

また水・融研究については、その出発点となるのが「初期水平運動と社会主義」（一九七三、二〇〇六年所収）と「同愛会試論」（一九七八、二〇〇六年所収）であるが、水平運動研究については人間主義やアナ派、社民系の活動に注目するところとなり、融和運動では同愛会を中心とする大正デモクラシー的運動を評価し、昭和恐慌を背景とする経済更生運動や一九三五年の「融和事業完成十カ年計画」に新しい評価を提示することになる。こうして、先生の業績にあっては、資料集や辞典類もそうである

が、七〇〜八〇年代には重要な研究成果が世に問われていたものであり、上記テーマの諸論文や論考が『近代日本人権の歴史』、『近代と被差別部落』、そして『近代日本の水平運動と融和運動』の大半を占める結果となっているのである。

ところが、私は先の「幅広い関連研究」が同時期に併行して進行していたことを、先生的一种余技のようにしか理解していなかつた。先生は一九七八年に喜田貞吉史学に言及しており、『こべる』に「部落史周辺」を連載したのは一九八四年だった。先生の部落問題への関心は、伝統的差別社会の複雑さや多様な差別問題との関係性の検討作業として同時並行していたのである。先生にとつて、これら多様なテーマ研究は、先の資本主義と部落問題研究や水・融研究となんら矛盾しなかつたのであるが、私にはスローガン化される民主主義や人権への違和感もあって、先生のなかで同居している理由がよくわからなかつたのである。

ただ今回、先生の著書を読み返す中で、民主主義を重視する先生の姿勢がこの「幅広い関連研究」を重視する理由の一端には触れることができたように思っている。それは、民主主義論を含めた部落史研究見直し論に伺えるように思

われるのである。

たとえば先生は「部落解放運動史の枠組み」(一九八四、一九九三年所収)で差別解消には、血縁、職域、地縁の共同体間の民主化が不可欠としているが、この視点はすでに「同和問題解決への思想的推移」(一九八〇、一九九一年「序章」)でも述べられており、しかも、民主主義は単なるスローガンではなく、「草の根」の民主主義は、古風ないい方をすれば、自分の一族に同和地区の出身者を加えてもいいのかということに悩み、その決断を下すことから始まるのです(三〇頁)と、結婚にかかわる人間の尊重が「草の根」民主主義の問題として提示されていた。この指摘は最初の著書と同年の「全国水平社創立七〇周年の歴史的教訓」(一九九二、一九九三年所収)でも「日本の「草の根」民主主義」の問題として強調されていた。

一九九二年に最初の著書が登場した当時、私はその内容の評価とは別に「人権」の名が冠されたことに違和感を持っていたが、今回その独りよがりな反発にもあらためて気づかされることになった。

このような理解を前提に先生の業績の再整理が許されるとすれば、水平・融和運動を両軸とした部落解放史像は『近代日本の水平運動と融和運動』や『部落の歴史 近

代』に結実し、部落問題を「草の根」民主主義を追求する視点として検討する作業は『近代日本人権の歴史』や『近代と被差別部落』から始まり、多様な差別・被差別状況を直視した人に目を向け、「人」の有り様を問う『人権から見た近代京都』へと結実していったと想定することもできるのでないだろうか。その「人権」について、先生はつぎのように述べておられる。

人権問題というのは建前と本音で使いわけをやって、うまく言い逃れができるテーマだと思いのです。ですから真面目、不真面目を問わず、どういう態度できちんと対処できるかどうかです。(中略) 知ったことで逆に差別を強めるようなことになるのが知識ですし、知ったことで憤りを感じて差別をなくそうとするのも知識ですが、それを動かすのは人間の品性というか教養だと思えます。そういう深い人間性に裏づけられないといけないと思っています。(『人権から見た近代京都』八四頁)

無類の読書家で近代部落問題・人権問題の新境地を開拓した秋定嘉和先生、偲ぶ会でまたお会いしましょう。

秋定さんの思い出

中島 智枝子

(ボツサムの念)

八月九日、秋定さんが亡くなられたという知らせを受けた。突然の訃報に驚くばかりだった。秋定さん宅には自転車で駆けつけることの出来る場所に居ながら生前お会いに行かなかったことが今も悔やまれてならない。

部落問題研究で大きな足跡を残されている秋定嘉和氏については人となりおよび足跡については『解放新聞京都版』第一二一四号(二〇二一年九月一日)に「秋定嘉和さんが逝去 部落問題研究資料センター所長」で触れられているので、本稿では「秋定さんの思い出」と題して秋定さんを偲ぶこととする。飾らない人柄で先輩面することなく誰彼なく親しく付き合ってくださいるので、秋定さんと呼ばせていただくのが私にとつて一番びつたりとする。以下失礼を顧みず秋定さんと呼ばせてもらうことをまずお断りする。

一九六七、八年頃、私が大学院生時代、日本史研究会の研究大会で受付係のアルバイトをした時のことである。受付係のテーブルに

風呂敷包みを抱えた男性が来られた。風呂敷包みから何冊かの冊子を取り出し、これを会員の方の目の触れるところに並べてくれないかというようやりとりが聞こえてきた。その後、並べられた冊子の正式な名称を忘れてしまったが朝鮮史および日朝関係史の論文集であったことは今も鮮明に覚えている。秋定さんをお見かけしたのはその時が初めてであった。秋定さんとの最初の出合いは日朝関係史研究者としての先輩であった。

その後、偶然にも秋定さんのご自宅近くに住むようになり、秋定さんのご自宅に出入りするようになった。その頃の秋定さん宅には、立命館大学日本史専攻の先輩や大勢の若い研究者が出入りしていた。秋定さんは研究熱心な若者ならばどのような人でも快く受け入れる、そんな感じだった。日本史、朝鮮語、朝鮮史、教育問題や経済学、哲学等、研究の分野は多方面に渡っていた。議論は、秋定さんを中心に学園闘争で問題提議された学問研究のあり方やその意義について、

はたまた、新しく発表された研究論文について話題に及ぶこともあった。ともかく様々な問題について私達はご家族の迷惑も考えずに夜遅くまで延々と議論をしたものである。

秋定さんが私たち若輩の者を相手に徹夜で議論が出来たこの時期は、八箇亮仁氏作成の「秋定嘉和氏の経歴および研究業績」(『部落史研究』第二号)によると兵庫県立尼崎工業高校の先生を辞められ、大阪工業大学等で非常勤講師をされていた頃である。秋定さんに比較的余裕があったからこのような機会が持てたのだろうか。

この時期に、秋定さんを中心にして朝鮮史および朝鮮問題に関心のある者が集まって日朝関係史研究会が結成された。私も参加して、月一回の研究会が始まった。やがて、大阪の部落解放研究所の研究所紀要『部落解放研究』の二号(一九七四年三月)に秋定さんは「明治初期の「賤民」統計表について」を、研究会のメンバーの池川英勝氏は「朝鮮衡平運動史年表」、私は「日韓併合」をめぐる総合雑誌の論調について」を同誌三号(一九七四年九月刊)に発表した。同誌四号(一九七五年三月)には、秋定さんが「初期水平社運動資料の一断片」を、研究会メンバーの朴成珪氏が「在日朝鮮人運動年表」を発表した。その後しばらく研究

会がもたれたがやがて開店休業状態になってしまった。

一九七四年に秋定さんは池坊短期大学に赴任された。この時期に渡部徹氏と共編で『部落問題・水平運動資料集成』全五巻をはじめ部落問題に関する数多くの論文を精力的に執筆されている。秋定さんの自著『近代日本の水平運動と融和運動』(二〇〇六年九月刊)の「まえがき」で「私は一九七〇年以後、近代部落史研究に入った」と記されている。秋定さん独自の視角からの部落史研究が開始されたといえよう。この時期の秋定さんの論文の中では、私にとって忘れられないのが「同愛会試論」(『部落問題論集』第二号、一九七八年三月)であった。私が大正デモクラシー期の思想に関心があっただけに興味深く読ませていただいた。

一九七七年、京都では京都部落史研究所が師岡佑行氏を所長として創立された。同研究所は『京都の部落史』編纂を目的にしたもので、私たちの共通の恩師に当たる奈良本辰也先生はじめ、井上清、原田伴彦、野間宏、上田正昭、渡部徹氏の六名が代表委員になり、秋定さんは同所の企画委員にいられた。私は朝鮮問題から部落問題に研究の方向を変え、『京都の部落史』編纂の仕事に研究員として加わった。

同所で開かれる研究会では秋定さんとは同席することとなり、部落問題や部落史について数多くの史料に触れられているだけにその豊かな知見と見識に教えられた。研究会での議論は、その後研究会場近くの居酒屋に場所を移して開かれる懇親会でも延々続けられたがこれまた忘れられない思い出である。

秋定さんといえば並外れた書物の蒐集家であった。ご自宅にある書物は一体何冊になるのだろうか。近所ということからつい甘えてしまったようで、図書館のような形で秋定さん宅の本をお借りした。読まなければと思う本は大体秋定さん宅にあった。また、秋定さんとの会話でまだ読んでないという、次回お会いした時にはご持参いただいたこともあり、その場でお借りするということもあった。お借りする本の多くにはカバーがかけられ、本の裏表紙のところには鉛筆でご自身の名前が記入されている。また、本文中にも重要箇所鉛筆で線が引かれている書物もあった。秋定さんの本についての懐かしい思い出である。

秋定さんは部落問題のほかにも『売買春問題資料集成』の編集はじめ廃娼問題で論文を書かれていたように、売買春問題等の性差別問題にも深い関心を寄せられてい

た。京都部落問題資料センターの所長になられた時である。売買春の仕事に関連する方からの聞き取りを行うこととなり、秋定さんと聞き取りを行う私たちとの間で勉強会が始まった。私たちはこの勉強会を花街研究会と称し、ほぼ月一回の割合で勉強会を始めた。その当時のレジメを見てみると秋定さんを交えて真面目に勉強会を行っていたことがわかる。この勉強会では秋定さんが蒐集された史料を数多く見せていただいた。基本的文献のほかには戦後直後のガリ版刷りの資料など多方面に渡る史料を収集されていることに驚嘆したものである。聞き取り相手との調整ができないまま聞き取りの話は立ち消えになってしまった。聞き取りが出来なくなったからといって、そこで勉強会を終えるのではなく、続けていけばよかったと今も悔やまれる。

こうして秋定さんの思い出を綴ってみると本当にいろいろな形で世話になったことが思い起こされる。あの研究論文を読んだか、あの本を読んだか、いつも決まってそのような会話になるのが常だった。どこまでも一学究として過ごされた先輩であった。

最後に、秋定さんと呼び、思い出を書かせていただいた今、改めて心からご冥福を祈りたい。

近年の膠研究の動向 覚書

のびしよつじ

(西播地域皮多村研究会)

それぞれ事情と契機を抱えての

ことと推察されるが、近年になって膠についての研究が複数の研究機関によって取り組まれるようになった。喜ばしいことである。現在大きくは三つの組織によって膠の研究が継続して行われている。

奈良製墨組合（協力・元興寺文化財研究所）・奈良女子大学・武蔵野美術大学である。けれども一応高いアンテナをもっていると思っ

ていないのが実情である。
膠とは生き物がもつコラーゲン蛋白を抽出して、接着剤として用いるものをいう。動物の場合コラーゲン蛋白は皮（他に骨・筋）に多く含まれるため、元来水に溶けないコラーゲンが長時間皮を煮ることで溶けだす。ゼラチンという。それを再び型に入れて凝固させ、使用時に温めて再び溶かして用いるのが一般的な方法であり、比較

的知られた用法であろう。

「煮皮」が原義と言われる。動物の皮、とりわけ牛皮を原料に用いるため、伝統的には被差別部落の生業として行われてきた。近代ではマツチ（燐寸）製造用膠が膠製造を一大産業にした。といって

も中小企業であり農閑余業の枠を出る企業は限られていた。大企業として著名なのは新田皮革（皮革から始まり調帯に特化し、さらには膠・ゼラチンの製造をおこなう）

であり、被差別部落にあつては奈良のオリエント工業と兵庫の旭陽化学工業が業界をリードしてきた。前近代では日本絵画で絵の具である顔料を画布（和紙・布）に定着させる三千本などと、墨（煤や油煙）を固形化するための墨膠、甲胃・槍・刀などの武器製作でとりわけ皮の接着に用いた膠などが大きな用途としてあつた。

もともと鹿皮を煮た鹿膠、魚の

浮袋を煮詰めた魚膠もあり、それらは部落と関わりなく製造されることもあつた。

(一)

『膠を旅する』所感

内田あぐり監修・青木茂他著『膠を旅する』（国書刊行会、二〇二一年五月） 三章構成。

第一章 膠の過去・現在・未来（上田邦介（画材商）・山本直彰（画家）・内田あぐり（武蔵野美術大学名誉教授）鼎談）

第二章 膠を旅する（現地調査・写真 網走・大阪浪速・貝塚・東京墨田・埼玉草加・兵庫 大崎商店・旭陽化学、古典的製造過程の記録「大崎商店」）

第三章 膠をめぐる論考（往復書簡 小金沢智（東北芸術工科大学専任講師）・金子朋樹（東北芸術工科大学准教授）／「神的暴力―ニカワ研究の余白に」北澤憲昭（武蔵野美術大学客員教授）／「膠雑考」朴亨國（武蔵野美術大学））

1. 北海道を除いていずれも被差別部落への訪問である。かつてならば強い不信感の手強い「歓迎」

を受けているところだが、特措法（三三年間にわたる部落解放施策）

を経て、解放運動団体や外向きの商売などを行っている部分は、好意的で素直な対応をしてくれるようになってきている。その社会的背景があつて、これらの調査と訪問が実現している。だが訪問者に部落問題やケガレといった、そうした歴史的背景の理解と認識があつたかは疑問。そうであつても直接に現地を訪れ、対話し、実際の仕事と作業を観察することは大きな意義があつたであろうと信じる。現場カラー写真が多く採用されているのは、撮影から本への顔写真の掲載まで許可されたということだろうから、先人の営み（仕事・作業現場やまして人間や顔の分かる写真を撮ること、出版物に掲載することなど長く許されることではなかった）があつて実現したことであつても、現在の明るい現状を反映してうれしい気持ちになつた。共同研究者の部落問題への理解と認識が少しでも身についたとすればいい成果といえよう。

2. 三千本膠が生産中止になるという購入業者からの伝言がこの

本の出発点だったとあるが、それは皆さんが訪問された姫路市福井の旭陽化学と同村の清恵商店のことである。村は多い時には関連も含めて四〇軒以上膠作りが行われていた。清恵商店は最後まで続けた親父さんがこつこつと冬場の和膠作りをしていたのである。けれども原料の皮の問題（原料がクロム鞣革）や体力が持たなくて、なにも中断しながらも今世紀初めまで続けていた。お亡くなりになった後に御子息が帰られて、冬場の膠作りを継ぎ一〇年近くはしておられたのではなかったか。なぜ辞められたか事情は伺わなかったが、最終的に終えられ、その後で、取引業者が入って、旭陽化学さんが男気を出して引き受けられたのであった。

あまりにプライベートな事どもをふくむこの過程全体が、本書にふさわしいエピソードであり、物語であつたはずである。

その最後の古典的膠作りの記録（写真・絵・テープの複製）は私の手元にある（探さなければならぬが）。そして絵と文章で、その工程全体を公開した（※2）。二

一世期に入ったこの時点でも装置や道具の写真を撮ることはできても、作業をする動作、ましてや顔が出る写真を撮影することは厳に禁止を事前に申し渡されていた。その後に和膠製作の大から小までのかなりの道具類を譲り受けた。いづれにせよ私たちのルポをみれば、本書に収録された膠作りが、まったく古典的でないことは、フレッシング・ドラム・扇風機などの大型機械の使用や、なにより天日干しのないことなど、明らかである。また技術の要諦さえ記されておらず、再現性もない。

※1 臼井壽光が五回にわたり史料紹介した戦前の大量の古文書（「戦時統制下の和膠業」1〜5、部落解放研究所紀要『部落解放研究』七八号〜九〇号、一九九一年〜一九九三年）は、旭陽化学の先々の所蔵されていた和膠組合の史料である。臼井らが調査に赴いたその時、偶然にも資料と文書は一箇所に積み上げられ処分されるところであつた。

※2 私たちが発表したルポとは「和膠のふるさとを訪ねて」（奈良県部落解放研究所紀要『部落解

放なら』一三〇号、二〇〇〇年三月）のことである。現地調査にあつては、もう少し掘削の深掘りを行って、せめてこのルポの存在あたりにはたどり着いてほしかった。

3. アイヌは別として共同研究者たちが訪ね歩いた場所は、勿論現在日本国内での和膠生産は絶えているのであるから、膠作りの現場でないことはいうまでもないが、そういうことではなく、歴史的にみても膠作りの現場であつたことがない場所である。大阪浪速江戸時代の渡辺村で一部膠焚きをしていた可能性はあるが、膠材料であるニベの集積はおこなつていたとしても、実際の膠作りは河内国植松村が主力だった。現在でも訪ねれば遺跡が確認できるのでないか。少なくとも江戸後期から近代にかけての出荷台帳は残されている（寄贈されて大阪商業大学に一括納められている）。

畿内Ⅱ関西では播磨国で「播州膠」の名で広く展開されたが、革作りが主体の高木村では行われず、周辺の西御着・余部・福井・越部などで展開された。大和Ⅱ奈良県の場合は現在まで続く墨膠の需要

があり、遅くまで奈良市内の部落や御所柏原村で行われている。事前調査が行われていれば、たとえば臼井が五回に涉つて史料紹介したもの（※1）を読んでいけば、戦前でのこれらの主要地域・部落を知ることができたと思われる。近代ではある時期まで滋賀県が主要な産地となつていた。これらがいれば「和膠のふるさと」Ⅱ故地である。いかなる情報に基づいて調査地が選定されたのかは、私には分からないが、素人選地であるとの評価は免れなからう。

4. 共同研究についてもうひとつ惜しまれるのは、現在奈良女子大学と奈良文化財研究所で多分別々に、膠研究が行われていることである。研究機関としてその情報は精粗は別として得られているのではないかと思うが、その様子は本からは察することができない。

どんな研究であれ、テーマを設定すればそこに過去の蓄積Ⅱ研究業績があるのは当然である。後続の研究者は、先達の研究を探索し、それを読み込み、乗り越える観点や視点をもって新たな史料や知見を提示する。本書がこうした正統

な道筋をたどるものであったかどうか。それは別の地平からの「なものねだり」の批評なのか。

右の一文は著者たち宛に送った書簡を、個人の名前や事情など若干の加除を施して載せた。

(二)

武蔵野美術大学共同研究はナマの部落問題と大きな交わりさえもちながら、本質的なところでは部落問題を学ぶことはなかったであろう。今回の文献紹介には奇妙な論点が含まれている。部落問題を意識的・無意識的に避けていることを示している文献を挙げることで、部落史文献になるというものである。奈良製墨組合(注①)・武蔵野美術大学・奈良女子大学(注⑦)・(注⑩)、そして江戸期の古梅園の製墨過程そのものからみえてくる忌避観念である。

奈良製墨組合が精力的に、「奈良墨」の顕彰をおこなうに至った理由は答えてもらえなかったが、文化庁の伝統文化活性化事業の助成の有効活用であることは間違いない。知る限り六点もの記録(注①)⑥が刊行をみている。冒頭述

べた通り墨とは煤+膠+香料、箱押しから成る。つまり膠は煤に続く重要材料である。古梅園六代元泰は膠は最重要な材料だと指摘している。江戸時代それを製造していたのは大半被差別部落であった。だが組合刊行物からその事実を知ることにはない。奈良市史料保存館には墨職であった宮武家文書がある。注④はその文書の翻刻である。もちろん膠も出てくる。ところがそれが部落問題と関わるなどということは一行もでない。

では宮武家文書にはそうした文書はないのか。そうではない。六車美保「製墨に用いる膠の入手について」(宮路淳子代表『古代東アジアにおける膠生産の研究』二〇一六年)によれば、墨職仲間は膠の入手についてa磯多方 b新規膠屋 c旧来膠屋の三ルートがあり、大和のみならず大坂からも仕入れていた。b・cは仲買・問屋であった。元の生産者が多くが部落であったことはいうまでもない。奈良奉行は奈良晒に次いで奈良墨を国産物に指定するとともに、「膠焚き奈良坂村十郎・六兵衛御冥加上納」と引き替えに、専売的に買い取ら

せる措置をとる。墨職仲間にとつて重大事である。bの新規膠屋とは他国産膠に絡んでおり、それはそれで大和国内の部落にとつても他人事ではなかったはずである。そんな大変な問題も注④にかかればなかったが如くに扱われる。今は二一世紀だといっておきたい。

なお元興寺文化財研究所が参画した文献目録や解題は、見落としの多い杜撰なものである(注②)。

(三)

宝永七(一七一〇)年奈良町に三八軒の墨屋があった(諸事控 墨屋之覚)。そのなかでも古梅園は近世奈良を代表する墨業者であるが、盤石の基盤を作ったのは漢文学を修徳した五代和泉元規(万治二(一六五九)年—享保四(一七一九)年)、生涯をかけて「和方式」(『墨譜』)を探究した六代元泰(元禄二(一六八九)年—寛保三(一七四三)年)であった。

墨とはごく単純にいえば、油煙か松煤を膠で固めたものである。日本では前者、中国は後者が主流。五代目は晩年に至りヒット作豊山

香(ぶざんこう 長谷寺山号)を創り、また松煙墨にも挑んだ。

和方式の出発点は『延喜式』である。ところが元泰は広東膠に拘り、長崎落札価格に二割を上乗せして買い取ると願ひ出る(注④)。かくして古梅園の膠は官許のあった寛保元年(元泰は同三年死去、以前から慣行として広東膠を買入れていたので元文五年あたりから)から文化一四年まで日本の膠は使

用しなかったことになる。 どうしてそこに拘ったのか。注⑧の『唐人墨製問答之記録』を読んでも分からない。元泰は事前準備を整えたいうで元文四(一七三九)年長崎に下り、唐人を相手に問答をおこなった(注⑦・⑧)。

膠は墨製の専要にして、精粗利害の差別にかゝる。尤委細承度候

唐人の答えを記していくが、唐では黄牛膠のみだが混濁を避けるためにも膠の吟味は大事、事前に受け取っていた牛皮膠・同再製膠はいい膠にみえる。とりわけ再製膠は唐国の墨より優れていた、それでも唐国の墨は良いというなら、膠が良すぎるのが原因かもしれな

い。「煙は墨中の君也、膠は臣也、煙負候てはしかるへきか」と答えている。唐国では煙と膠を練り込んで型に入れた後も槌で数千返も打つというが、元泰はそれは一回もないという。むしろその当たりに違いがあるかに思えるが、元泰は始めから結論ありきで広東膠へ執着する。その強いこだわりの根っこが分からない。

元泰最晩年の寛保年間、吉宗は途絶えていた紀州藤代墨の再興をはかり、松煙墨藤白墨と銘打って広め幕府御用墨となり、奈良墨の地位を揺るがすほどになっていく。七代元彙は写経用には清浄な墨でなければならぬと、木にかわ、草にかわを作り出したという。どうしてもそれこそが天下の製墨製造・商を行う古梅園にとつての、古層にある意識だったのではないか。

いずれにせよ膠Ⅱ和膠などというものは、部落問題や部落史の分野にあってもマイナーな対象であるのだろう。近刊『滋賀の同和事業史』（滋賀県人権センター、二〇二一年一月）でも膠のくずを二

べと呼ぶなど、また近代の滋賀県の和膠業についてまとめた文献（「近江膠沿革」鈴木栄樹史料紹介、部落問題研究所紀要『部落問題研究』一四八号、一九九九年）があるにもかかわらず参照された様子は無い。いずれも膠の研究が部落史研究の分野にあつてさえ、広い関心と認知を得ていないことを示しているといえよう。

近代部落史研究の分野にあつて、忘れられがちな対象である膠・ゼラチンを視野に入れて誠実な探究をおこなったのは秋定嘉和氏が唯一といつていいのではないか。巨星落つ。ご冥福をお祈りいたします。

謝辞

小稿であつても成るについては奈良女子大学・宮路淳子、奈良文化財研究所、奈良大学・木下光生、奈良市文化財課、奈良県立民俗博物館、各機関・諸氏にお世話になった。なお奈良製墨組合ならびに大谷俊太氏からは協力を得られなかったことは残念であつた。

注
奈良製墨組合 刊行文献
①の組合史以外はいずれも文化庁「地域伝統文化総合活性化事業」等の助成によるもの
②『奈良製墨文化史—奈良製墨協同組合設立五〇周年記念』二〇〇〇年
③『中村家所蔵墨譜』二〇一五年三月
④『官武家旧蔵文書』二〇一五年三月
⑤『近世奈良墨資料・第一集・古梅園文書1』二〇一六年三月
⑥『近世奈良墨資料・第二集・古梅園文書2』二〇一七年三月
⑦大谷俊太他「古梅園記録」（正徳三年）安永末、文化まで追記あり）解題と翻刻上・中・下
（『奈良女子大学国語国文学会紀要』叙説』三二（二〇〇五年）・三三（二〇〇六年）・三四（二〇〇七年））
⑧松尾良樹・的場美帆「唐人墨製問答之記録—「古梅園造墨資料」翻刻と解題2」（『奈良女子大

学古代学術研究センター）古代学』四（二〇一二年）
⑨的場美帆「成島道筑老御門之返書—「古梅園造墨資料」翻刻と解題5—」（『奈良女子大学古代学術研究センター』古代学』五（二〇一三年））
⑩六車美保「膠に関する願書資料—「古梅園造墨資料」翻刻と解題7—」（奈良女子大学古代学術研究センター）『古代学』六（二〇一四年）
⑪六車美保「魚鱈膠に関する新資料—「古梅園造墨資料」翻刻と解題9—」（奈良女子大学古代学術研究センター）『古代学』七（二〇一五年）

部落解放 811 (解放出版社刊, 2021. 10) : 600円

特集 沖縄とヤマトの出会い直し

小特集 差別戒名の発覚から45年 今 (上)

はじめに 問われた仏教の根本 日野範之 / 「差別戒名・現地研修会」の報告 1 私たち宗教者が行なったこと 佐々木基文 / 「差別戒名・現地研修会」の報告 2 「人でなし」はどちらなのか 西蔵全悠

研究と人柄で敬愛された秋定嘉和先生を偲ぶ 朝治武

ソーラーパネルのある部落 兵庫県山王 編集部

リレーエッセイ 水平社100年に想う 8 自ら立ち上がる今村登

もう一つの隔離 ハンセン病療養所附属保育所を生きて

12 「龍田寮」最後の保母たち 福岡安則

春告鳥は地を這う 戦後部落解放運動史の検証と再考 12 部落解放運動が胎藏していた社会変革への可能性と限界 2 谷元昭信

部落史研究 6 (全国部落史研究会刊, 2021. 3) : 2,000円

特集 部落史シンポジウム/部落問題をめぐる呼称の歴史の意味

身分呼称「元穢多」の成り立ち—「解放令」以後の社会へ— 畑中敏之 / 「新平民」「貧民部落」「特種(特殊)部落」呼称について 八箇亮仁 / 二〇世紀前半期の部落差別撤廃運動と行政における部落呼称と社会意識 井岡康時 / 「未解放部落」「被差別部落」という呼称について 割石忠典

静岡県小笠地域における融和運動としての「満州」移民—融和運動家井上良一の事例— 中山敬司

前近代における差別呼称が確認できる絵図(古地図)のデジタル公開についての提言 全国部落史研究会

「提言」の掲載にあたって(経過説明) 廣岡浄進

全国部落史研究会会員 著書・論文等目録(2020年1月~2021年3月)

各地研究所(会) 紀要などの紹介(2020年1月~2021年3月)

部落史研究報告集 25 (八幡浜部落史研究会刊, 2021. 6)

座談会「愛媛の水平運動—証言を基に水平社の精神を学ぶ—」

小学校で起こった部落差別事件 水本正人

愛媛の水平社支部は、学校における部落差別事件に、どう取り組んだか 五藤孝人編: 水本正人・甲野正人・菊池正・矢野俊治・西園寺千代

融和団体「愛媛県善隣会」の菊間町での活動—青年指導者 稲田宇吉の活躍— 山本康樹

本願寺史料に現れる伊予大洲—留役所「伊予諸記」より— 水本正人

和歌山城下の牢番頭共による「在家(有宿の百姓、町人

身分) 筋召捕」の復活 水本正人

今をどう生きるか—愛媛発シトラスリボンプロジェクト— 五藤孝人

水と村の歴史 信州農村開発史研究所紀要 33号 (信州農村開発史研究所刊, 2020. 3)

天明三年上信一揆の再検討 1—一揆勢の進路図をめぐって— 斎藤洋一

史料紹介 「戊辰之記」—五郎兵衛新田村名主の慶応四年(一八六八)日記— 浅科古文書研究会

信州農村開発史研究所紀要『水と村の歴史』第16号~第32号目次

『信州農村開発史研究所報』第75号~第151号目次

むこうに見えるは 21号 (人権ネットワーク・ウェブ21刊, 2021. 7)

国勢調査小地域集計から見る改進黨地区 5

リベラシオン 182 (福岡県人権研究所刊, 2021. 6) : 1, 320円

同和教育との出会いから、部落問題を自己課題に 吉岡辰実

川向秀武氏の教育への「問い」とライフストーリー 6—福岡における教育実践・運動推進者としての活動を中心として— 板山勝樹

書評 眞野豊著『多様な性の視点でつくる学校教育—セクシュアリティによる差別をなくすための学びへ—』 塩田洋明

満州医科大学最後の学長・守中清—日本人難民の感染症蔓延防止に献身— 小正路淑泰

松本治一郎・井元麟之研究会 資料紹介 松本治一郎旧蔵資料(仮) 紹介 3—浜嘉蔵から松本治一郎宅への書簡— 森山沾一

図書紹介 和歌山人権研究所編刊『女人禁制 伝統と信仰』 井上法久

民衆史こぼれ話 片隅に生きた人たち 42 「ひえもんとり」の周辺 9 石瀧豊美

図書紹介 部落解放・人権研究所朝鮮衡平運動史研究会編『朝鮮衡平運動史料集・続』 竹森健二郎

故・秀村選三先生を偲ぶ 田中美帆

和歌山研究所通信 73 (和歌山人権研究所刊, 2021. 9)

東尋坊と和歌山と生活保護 下地毅

和歌山人権研究所紀要 9 (和歌山人権研究所刊, 2021. 8) : 1, 100円

新型コロナウイルス禍における差別の理解と解消に向けて 村山綾

新型コロナウイルスによりあぶり出された既存差別の問題 安田賢行

母屋取毀ち考—被差別民衆史の視点から「教祖伝」を読む— 池田士郎

応神天皇論 記の大靱和氣命ないしは品陀和氣命、紀の
譽田別命とは何者か 辻本正教

奈良女子高等師範学校附属小学校と「部落問題」 松本
博史

奈良人権部落解放研究所 研究紀要総目次

はらっぱ 398 (子ども情報研究センター刊, 2021.9)

特集 今、大阪から発信する

これからの街づくりで大切なこと～釜ヶ崎からこそ見える～ 生田武志／公教育をわたしたちの手に取り戻す闘いを！～学ぶ権利の主体は子ども～ 久保敬／今ここで生きることを楽しむ放課後 渡邊充佳／つながりあってつくるわたしたちのまちの医療 永久教子／差別を乗り越え、道を切り拓いていく 友永健吾

ヒューマンJournal 237 (自由同和会中央本部刊, 2021.6) : 500円

新しい部落史 7 「解放令」150年を考える 灘本昌久

ヒューマンJournal 238 (自由同和会中央本部刊, 2021.9) : 500円

新しい部落史 8 清目・河原者の仕事 灘本昌久

ヒューマンライツ 400 (部落解放・人権研究所刊, 2021.7) : 500円

特集 届け！被差別の声

識字運動の担い手たちが語る 7 懸命に生きてきたこと書き残したい 後編 木本久枝さん (住吉輪読会・土曜組)

編集：熊谷愛

ヒューマンライツ 401 (部落解放・人権研究所刊, 2021.8) : 550円

特集 ソーシャルファームと新しい働き方

識字運動の担い手たちが語る 8 識字は、第二の人生、そして楽しみ (前編) 國島カヅ子さん、中村和子さん (生江識字学級) 編集：菅原智恵美

ヒューマンライツ 402 (部落解放・人権研究所刊, 2021.9) : 550円

特集 デジタル改革関連法とセンシティブ情報

識字運動の担い手たちが語る 9 識字は、第二の人生、そして楽しみ (後編) 國島カヅ子さん、中村和子さん (生江識字学級) 編集：菅原智恵美

部落解放 807 (解放出版社刊, 2021.7) : 600円

特集 ネット差別と法

水平社100年に想う 5 100年前と、100年後を想像する 齋藤直子

もう一つの隔離 ハンセン病療養所附属保育所を生きて

9 裁判で父娘関係認められず 福岡安則

春告鳥は地を這う 戦後部落解放運動史の検証と再考 9 同和対策事業特別措置法制定の意義と同和行政をめぐる闘い 谷元昭信

部落解放 808 (解放出版社刊, 2021.7) : 1,000円

第47回部落解放文学賞

部落解放 809 (解放出版社刊, 2021.8) : 600円

特集 夜間中学校のこれまで・いま・これから

あつてはならないが、なくてはならない学校 夜間中学の歴史と現在 江口怜／夜間中学校の現場から～2021～ 竹島章好／夜間中学校のこれから 金孝誠／札幌遠友塾 自主夜間中学の歩みと札幌市立夜間中学の開校 工藤慶一／だれ一人置き去りにしない教育を求めて 岡山自主夜間中学校の取り組み 城之内庸仁

本の紹介

金子マーティン『ロマ民族の起源と言語—インド起源否定論批判』 友永健三／孫美幸『深化する多文化共生教育—ホリスティックな学びを創る』 山本崇記

リレーエッセイ 水平社100年に想う 6 誰かを排除しない、抵抗のための誇りを求めて 瀬戸徐映里奈

ハンセン病患者に関する長野県公文書流出事件が提起した問題 藤野豊

ラムザイヤーの理論と政治的背景 歪曲と偏見に満ちた差別論文の撤回を 片岡明幸

もう一つの隔離 ハンセン病療養所附属保育所を生きて

10 保母と実母のはざままで 葛藤 福岡安則

春告鳥は地を這う 戦後部落解放運動史の検証と再考 10 1970年代一部落解放運動の疾風怒濤の時代 谷元昭信

部落解放 810 (解放出版社刊, 2021.9) : 600円

特集 マーク・ラムザイヤー論文を批判する

水平社運動論を糺す 藤野豊／同和対策事業は成果がなかったのか 角岡伸彦／「公娼」論／「植民地公娼」論を検証する 金富子

本の紹介 姜徳相聞き書き刊行委員会『時務研究者姜徳相—在日として日本の植民地史を考える』 鈴木健一

リレーエッセイ 水平社100年に想う 7 一つひとつの輝きが、道となる 広沢佑

水平社創立者・西光万吉さんと私 没50年に偲ぶ 川口正志 皮革職人の自負心から部落のアイデンティティを育む 水野松男

濁酒からみる在日コリアンの歴史 李杏理

もう一つの隔離 ハンセン病療養所附属保育所を生きて

11 ダンスホールで見初められて 福岡安則

春告鳥は地を這う 戦後部落解放運動史の検証と再考 11 部落解放運動が胎藏していた社会変革への可能性と限界

1 谷元昭信

都市「養正地区」を事例に一 井手幸喜

文芸の散歩道 夏目漱石と社会主義ノート 2—空想的社会主義との出会い— 水川隆夫

連載 写真で見る水平運動史 5 二 大正デモクラシーと全国水平社の創立 5 徹底的糾弾闘争 尾川昌法

人権と部落問題 951 (部落問題研究所刊, 2021. 9) : 660円

特集 生活保護裁判と生存権保障

文芸の散歩道 鷗外の遺書—大谷晃一『鷗外、屈辱に死す』— 福地秀雄

写真で見る水平運動史 6 二 大正デモクラシーと全国水平社の創立 6 婦人水平社と少年少女水平社 尾川昌法

人権と部落問題 952 (部落問題研究所刊, 2021. 10) : 660円

特集 ジェンダー平等をめざして

声明 ジョン・マーク・ラムザイヤー氏の部落問題に関する論文について 部落問題研究所理事会・研究委員会
八鹿高校事件から半世紀 第1章 八鹿高校事件の舞台と全体像 1 水平社と国民融合全国会議 東上高志

写真で見る水平運動史 7 三 連帯の広がり政治闘争 7 政治闘争への進出とアナ・ボル対立 尾川昌法

振興会通信 159 (同和教育振興会刊, 2021. 7)

同朋運動史の窓 65 左右田昌幸

崇仁〜ひと・まち・れきし〜 12 (崇仁発信実行委員会刊, 2021. 11)

特集 地域コミュニティ

月刊スティグマ 300 (千葉県人権センター刊, 2021. 7) : 500円

差別とは何か、偏見とは何か 5 福岡安則

月刊スティグマ 301 (千葉県人権センター刊, 2021. 8) : 500円

差別とは何か、偏見とは何か 6 福岡安則

月刊スティグマ 302 (千葉県人権センター刊, 2021. 9) : 500円

何故、誰が、差別戒名をつけたのか 坂井康人

月刊地域と人権 447 (全国地域人権運動総連合刊, 2021. 7)

全国水平社創立百周年 部落解放運動100年の歴史 4 丹波正史

月刊地域と人権 448 (全国地域人権運動総連合刊, 2021. 8)

水平社創立百周年を部落問題解消のゴールに 5 新しい「差別意識」解消は法・条例より、人権を本音で語れる地域づくりで 植山光朗

月刊地域と人権 449 (全国地域人権運動総連合刊, 20

21. 9)

「上からの近代化」が「米騒動」・部落問題を残した 井本三夫

地域と人権京都 840 (京都地域人権運動連合会刊, 2021. 7. 1) : 150円

戦後京都市の部落解放運動と同和行政の沿革 27 川部昇

地域と人権京都 841 (京都地域人権運動連合会刊, 2021. 7. 15) : 150円

戦後京都市の部落解放運動と同和行政の沿革 28 川部昇

地域と人権京都 842 (京都地域人権運動連合会刊, 2021. 8. 1) : 150円

戦後京都市の部落解放運動と同和行政の沿革 29 川部昇

地域と人権京都 843 (京都地域人権運動連合会刊, 2021. 8. 15) : 150円

戦後京都市の部落解放運動と同和行政の沿革 30 川部昇

地域と人権京都 844 (京都地域人権運動連合会刊, 2021. 9. 1) : 150円

戦後京都市の部落解放運動と同和行政の沿革 31 川部昇

地域と人権京都 845 (京都地域人権運動連合会刊, 2021. 9. 15) : 150円

戦後京都市の部落解放運動と同和行政の沿革 32 川部昇

であい 711 (全国人権教育研究協議会刊, 2021. 6) : 160円

人権文化を拓く 283 みんなつよくて、みんなよわい 長谷川義史

であい 712 (全国人権教育研究協議会刊, 2021. 7) : 160円

人権文化を拓く 284 『町の本屋』から見えること 二村知子

であい 713 (全国人権教育研究協議会刊, 2021. 8) : 160円

人権文化を拓く 285 アルビノとして生きる 藪本舞

同関協だより 61号 (真宗大谷派同和関係寺院協議会刊, 2020. 12)

崇仁まちづくりと京都市立芸術大学移転 前編 山内政夫さん

同関協がゆく 12 後編 「是旃陀羅」と「旃陀羅」差別 鶴見晃さん

同関協だより 62号 (真宗大谷派同和関係寺院協議会刊, 2021. 6)

崇仁まちづくりと京都市立芸術大学移転 後編 山内政夫さん

対談 「是旃陀羅」問題に向き合う 青木玲さん×濱口和也

奈良人権部落解放研究所紀要 39 (奈良人権部落解放研究所刊, 2021. 3) : 1,000円

1. 9. 5)

小森龍邦『わが闘魂の半生』26

解放新聞広島県版 2399 (解放新聞社広島支局刊, 2021. 9. 15)

小森龍邦『わが闘魂の半生』27

解放新聞広島県版 2400 (解放新聞社広島支局刊, 2021. 9. 25)

小森龍邦『わが闘魂の半生』28

架橋 45 (鳥取市人権情報センター刊, 2021. 8)

特集 「水平社宣言採択100年をまえにして」

水平社創立の理念を共有し、人類最高の完成へ 駒井忠之／水平社創立の意味を問い直す 黒川みどり／全国水平社創立100年に思う 西村芳将／まだ見ぬ未来に「よき日」が訪れるように 衣笠尚貴

講演録 人権文化あふれる学校づくり 土田光子

みんなの架橋～架橋でめぐる全国の人権機関～草津市立人権センターのあゆみ 伊東雄一

語る・かたる・トーク 316 (横浜国際人権センター刊, 2021. 6) : 550円

語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う「マリアの本音」 吉成タダシ

部落史 学び直し 問い直しのススメ 3 差別の被害者も加害者も出さない 外川正明

語る・かたる・トーク 317 (横浜国際人権センター刊, 2021. 7) : 550円

語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う「ユウの卒業」 吉成タダシ

部落史 学び直し 問い直しのススメ 4 こども園、小学校、中学校で一貫した人権学習を 外川正明

語る・かたる・トーク 318 (横浜国際人権センター刊, 2021. 8) : 550円

語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う「救われたのは」 吉成タダシ

部落史 学び直し 問い直しのススメ 5 教員の力量を高める授業研究会 外川正明

語る・かたる・トーク 319 (横浜国際人権センター刊, 2021. 9) : 550円

語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う 東京オリンピックと人権 吉成タダシ

部落史 学び直し 問い直しのススメ 6 次の世代へと継承していくために 外川正明

グローブ 106 (世界人権問題研究センター刊, 2021. 7)

全国水平社創立者、桜田規矩三 山内政夫

国際人権ひろば 158 (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2021. 7) : 350円

特集 対談「人権はあなたのもの、わたしのもの」—今こそ人権教育を問い直す 馬橋憲男×阿久澤麻理子

国際人権ひろば 159 (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2021. 9) : 350円

特集 反人種主義を議論した世界会議「ダーバン会議」から20年・難民条約の加入から40年の日本

障害史研究 2号 (九州大学大学院比較社会文化研究院刊, 2021. 3)

発心の凶像—中世仏教説話画に描かれた病と障害— 山本聡美

江戸中後期における<障害児>・<奇形児>の捨て子や子殺しに対する認識 クウィーラ, ダーヴィト=ドミニク 中世絵画史料《遊行上人縁起絵》《聖徳太子絵伝》《融通念仏縁起絵》諸本にみる不具および犬神人の描写に関する予備的考察 末森明夫

武家夫婦の日記と病気記録—広島藩儒者頼春水・静子の<障害>認識を考える— 高野信治

矜持と労苦—傷痍軍人とその妻の戦後経験— 山下麻衣, 藤原哲也, 今城徹

上古・中古日本と古代中国の啞語彙位相における「啞不能語」の定位 末森明夫

障害史関連の博物館、史料館、美術館等の紹介—欧米地域を中心として— クウィーラ, ダーヴィト=ドミニク

「障害史研究 (Disability History Studies) のための日本古典文学研究序説」合評会報告 福田安則

史料紹介 校訂版『鞠洲医事文稿』三編 大島明秀

じんけん 481 (滋賀県人権センター刊, 2021. 5) : 440円 特集 「滋賀の同和事業史」発行にあたって

「滋賀の同和事業史」の編集・執筆を終えて 井岡康時／1948年10月30日～「滋賀の同和事業史」編さんの過程で考えたこと～ 田中延和／同和事業史の基礎資料収集から見えてきた部落差別事件の時代背景による変化 山口敏樹／「滋賀の同和事業史」に関する資料収集から見えてきたこと 山村暁子

人権と部落問題 949 (部落問題研究所刊, 2021. 7) : 660円

特集 東京オリンピック・パラリンピックの行方

文芸の散歩道 夏目漱石と社会主義ノート 1—大日本帝国憲法・教育勅語のころ— 水川隆夫

写真で見る水平運動史 4 二 大正デモクラシーと全国水平社の創立 4 京都で創立大会 尾川昌法

人権と部落問題 950 (部落問題研究所刊, 2021. 8) : 660円

特集 戦争と平和を伝える

現地報告 かつての「同和地区」に大きな変化が！—京

収集逐次刊行物目次 (2021年7月～9月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

アイユ 361 (人権教育啓発推進センター刊, 2021.6)
インタビュー なぜ解放令が公布されても部落差別は
なくならなかったのか 灘本昌久

部落差別と結婚差別 6 「Kakekomi寺…結婚差別」ネッ
トワークの取組 6 大賀喜子

紹介 展覧会「膠を旅する 表現をつなぐ文化の源流」

アイユ 362 (人権教育啓発推進センター刊, 2021.7)
インタビュー アイヌプリ 相手のことを「思う」 秋辺
デボさん・本田優子さん

部落差別と結婚差別 7 「Kakekomi寺…結婚差別」ネッ
トワークの取組 7 大賀喜子

アイユ 363 (人権教育啓発推進センター刊, 2021.8)
インタビュー ハンセン病問題ははまだ終わっていない
潮谷義子さん

部落差別と結婚差別 8 「Kakekomi寺…結婚差別」ネッ
トワークの取組 8 大賀喜子

明日を拓く 129・130 (東日本部落解放研究所刊, 202
1.9) : 2,200円

小特集 川向秀武さんを偲ぶ

特集 若手チームが訪ねる・聞く・学ぶ 1 栃木県大平町
を訪ねる

朝田教育財団だより 35 (朝田教育財団刊, 2021.8)
京都から、人権を考える～同和問題の視点から～ 山本
崇記

IMADR通信 207 (反差別国際運動刊, 2021.8)

特集 コロナと世界のマイノリティ・コミュニティ

ウィングスきょうと 165 (京都市男女共同参画推進協
会刊, 2021.8)

図書情報室新刊案内

津止正敏著『男が介護する 家族のケアの実態と支援の
取り組み』／尹雄大著『さよなら、男社会』

解放新聞 2995 (解放新聞社刊, 2021.7.5) : 115円
本の紹介 とくしま社会運動資料センター刊『部落史関
連講座講演録』

解放新聞 2996 (解放新聞社刊, 2021.7.15) : 115円
近世身分制に関するマスコミ等の誤解に対する中央本部
見解

解放新聞 2997 (解放新聞社刊, 2021.7.25) : 115円
101年目からを展望する連続講座 6・7

本の紹介 山口県人権啓発センター編『入門 山口の部落
解放志』 阿南重幸

解放新聞 3000 (解放新聞社刊, 2021.8.25) : 115円
「解放新聞」との半世紀 割石忠典

解放新聞 3001 (解放新聞社刊, 2021.9.5) : 115円
ツラッティ千本 移転・オープンする

解放新聞京都版 1211 (解放新聞社京都支局刊, 2021.
7.15) : 70円

玄々斎の茶室を再建 東三条の宝として守り続ける

解放新聞京都版 1213 (解放新聞社京都支局刊, 2021.
8.15) : 70円

東三条のルーツは四条に 古銭は革紐で束ねられていた

解放新聞東京版 1004号 (解放新聞社東京支局刊, 202
1.7.1) : 110円

書評 栃木裕『屠畜のお仕事』 岩田明夫

解放新聞広島県版 2391 (解放新聞社広島支局刊, 202
1.6.25)

小森龍邦『わが闘魂の半生』25

解放新聞広島県版 2398 (解放新聞社広島支局刊, 202

事務局よりお知らせ

◇秋定先生には、2005年6月に当時空席になっていた所長を引き受けていただいて以降、16年にわたって大変お世話になりました。所長になってからも当センターのことを「師さんの研究所」と呼ばれ、大学時代からの親友の師岡佑行さんが所長だった京都部落史研究所を引き継ぐ当センターのあり方、将来について熱心に考えてくださいました。ここ数年は体調を崩されてこちらに来られることが少なくなり、残念でした。秋定先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

□所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター3階

□TEL/FAX 075-415-1032

□URL <http://shiryo.suishinkyokai.jp>

□開室日時 月曜日～水曜日・金曜日・第2・4土曜日 10時～17時(祝日・年末年始は休みます)

□交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩5分